



2023年度所蔵資料調査：絵図、絵葉書類

菊地, 真
井口, 琢人
藤本, 奈緒

(Citation)

海事博物館研究年報, 51:53-56

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490226>



2023年度所蔵資料調査：絵図、絵葉書類

神戸大学海事博物館専門員 菊地 真
神戸大学人文学研究科博士後期課程 井口 琢人、藤本 奈緒

1. はじめに

2022年度後半から2023年度にかけて、当館専門員・菊地の外部資金による研究の一環として、神戸大学海事博物館所蔵資料の整理・調査・研究を実施した。本稿ではその成果の一部を報告する。

研究の一つは、神戸市による若手研究者の研究助成である大学発アーバンイノベーション神戸の助成金に基づく。特に神戸を特徴づけている海・港湾にかかる海事博物館所蔵の地図資料類を歴史地理学的に研究するものであり、2022年度秋から2023年度にかけて実施した。いま一つは、JFE アジア歴史財団によるアジア歴史研究助成に基づく研究である。こちらは同じく海事博物館などに所蔵されている資料を活用し、神戸さらには東アジア海域における日本人の地理的認識や行動の拡大過程を検討するものであり、2023年12月から2024年12月までの計画で、現在進めている。

本稿は作業した成果報告として、主要なものを列挙し簡単に説明を加えた。詳しくは後日、個々に資料紹介をしたいと考えている。また2024年度以降、随時海事博物館の企画展や常設展において、みなさまにご披露したい。なお本報告は菊地と本学教育研究補佐員として調査に共に従事した井口、藤本の連名とし、各章末に執筆者名を明記した。(菊地)

2. 神戸周辺海域の地図類の整理・データベース化

研究の前提として各種地図の概要、つまり目録作成と高精細な画像データの撮影がある。目録は通常、博物館で資料受贈時に作成されるが、海事博物館の所蔵資料は前身の海事資料館時代からのものも多く、目録データは簡易的にとどまり十分なデータ整理が及んでいないケースが多い。そのため、この機会に悉皆的な目録作成を遡及し行うことを企図した。また当館は主要な資料をホームページでデータベース公開しているが、そこで公開している写真は解像度が低く、写真をそのまま研究利用したり展示などで複製・拡大利用す

るのに適していない。これは当時のデジタルカメラ器材の影響であり、今回、できるだけ精度の良いデジタルカメラやスキャナーを用いて、より高画素の画像データ撮影をすることとした。

調査は地図類であり、海事博物館が所蔵する絵図、近代以降の地図、古典籍のうち海事に関する記録を選んで実施した。調査資料の選定に際しては、松下正和氏（神戸大学地域連携推進本部）と増山聖子氏（奈良工業高等専門学校）にご助言を頂いた。目録調書を再度作成したうえで写真撮影を行った。調査した点数は計145件、点数としては約300点からで、写真は60件撮影済みである。

絵図は航路図で、大阪湾岸が含まれるものを選んだ。「八箇州船路之図」は1863年（文久3）の版本で、八箇州、すなわち摂津・和泉・紀伊・阿波・讃岐・淡路・播磨・備前の沿岸を描く。幕末期のため沿岸防備の砲台である台場が半円形のマークで記載されている。和田岬周辺を図示した。湾岸の簡略な図だが、小振りでも瓦版程度の大きさのため、持ち運んで湾内を把握するには容易であったろう。



図1 「八箇州船路之図」、「大坂より江戸迄海上浦々島々磯瀬船掛場所」(部分)



図2 「大坂より江戸迄海上浦々島々磯瀬船掛場所」の絵巻折り曲げ箇所

「大坂より江戸迄海上浦々島々磯瀬船掛場所」(以下、「海事博本」と略)は2巻本で、大阪から伊勢・名古屋までと、名古屋から江戸までに分けられている。大阪と江戸の間は紀伊半島などがあるため沿岸は一直線ではないが、この絵巻は図のところどころに折線があり、絵巻に記された折線で折って半円形をあわせるように重ねていくと、半島等の形状が再現できるように作成されている。航路図は屏風仕立てなど装飾性の強いものから実用本位のものまでがあるが、海事博本は中間的で、港・浅瀬・風の様子などを細かく記入してあるほか、陸地もやや簡単ではあるが主な目標地点を描いている。

この海事博本は調査の結果、神戸市立博物館に同一資料のあることが判明した。神戸市立博物館で2022年に公開されていた「江戸から大坂迄海岸縁絵図」(川口コレクションのうちの一つ、以下「神戸市本」とする)がこれに該当する。小野田一幸氏(神戸市立博物館)によれば、神戸市本は未表装で計6点に分かれた状態であるが、両者を比較検討したところ、描いている内容が基本的に同じであった。神戸市本も絵図の途中に空白があり、空白部両端の赤線を重ね合わせ、半島状に折り曲げて見ることが可能となっている。絵図であるため互いに描き方は異なり、海事博本よりは神戸市本の方が比較的、沿岸の地形や陸地の目標物などの表現は丁寧である。瀬の様子など細部の説明書きは、何か所か互いに重複せず、作成時ないし書き写し時に加除が生じている。なお海事博本は絵巻に仕立てた際に、冒頭に前書きとして、大阪から江戸までの距離(里数)を7つほどに区切って表記しているが、神戸市本は前書きが存在しない。記載内容については小野

田氏のほか、大国正美氏(神戸深江生活文化史料館)のご協力を得て、冒頭部分を中心に読解を進めている。
(菊地・井口)

3. 関連地図・資料類の調査

前述したのはいわゆる近世の絵図や典籍資料であるが、近代以降の資料も整理を行ってきたので以下、いくつかを例示する。過去の寄贈資料のうち、海図等の一群を改めて整理した。この資料は国内の水路部作成による海図(88点)と、イギリスのGeorge Flip & San社製の海図(28点)をはじめとした、合計138点の資料群である。

国内の海図は、宇部港、徳山港、坂出港等の瀬戸内海の港湾部が描かれている。海軍水路部時代に作成された海図も数点存在しているが、多くは海上保安庁時代に作成された海図であり、海軍時代に作成された海図も最終改正年から戦後以降も継続して使用されている。海図の最終改正年は1937年から1977年(昭和12~52)までの長期に及んでおり、さらに終戦直後の昭和20年代や30年代に最終改正された海図が多くを占めている。多くの海図には図中に鉛筆書きで掃海海域が記されており、終戦直後の様子が垣間見られる。イギリス製の地図群は作成年代が不明であるが、ロシア帝国やオーストリア・ハンガリー帝国等が地図中に記載されていることから、少なくとも第一次世界大戦以前の1900年から1914年と考えられる。世界を複数地域に分割して描き、イギリスを中心としたヨーロッパや北米が中心であるが、日本や中国を対象とした地図もあり内容的には全世界を網羅している。

支網切断斧は大正期以降に辰馬汽船(戦後は新日本

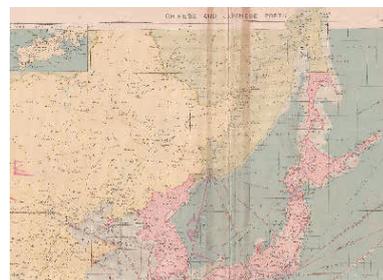


図3 世界図、海図(いずれも一部)

汽船、山下新日本汽船と変遷していく)で導入された貨客船の進水式で使われた斧である。ほか戦後の資料も含め10件の目録を作成した。昨年度および2023年度の企画展等で順次、展示公開をしている。

近代の資料として、客船の航路案内・メニュー・乗船券などがある。多種多数におよぶ物品をスクラップブックに貼りこみ、あるいはファイルに挟み込んだ冊子体の資料が5・6件あり、順次整理を進めている。うち2件は昭和初期の欧州航路に乗船した人物が乗船中に収集したメニューや自ら撮影した写真などをスクラップした資料となっている。



図4 支綱切断斧、スクラップブック (いずれも一部)

(井口)

4. 伊藤安次郎資料 (進水式絵葉書他)の調査

2023年5月、寄贈者の祖父に当たる故・伊藤安次郎氏の資料が海事博物館に託された(資料群の名称としては敬称を略し、「伊藤安次郎資料」と称する)。伊藤安次郎氏は1888年兵庫県三田市に生まれ、1910年に京都工芸学校を卒業後、印刷会社勤務を経て川崎造船所に入社し、1945年に退職する。船舶の内装設計などを職務にしたと伺っているが、在職中の大正年間から、主に川崎造船所で建造された船舶の進水式絵葉書のデザインを手がけた。戦後の1951年、川崎重工の造船部に復帰し、1953年にその生涯を終えるまで川崎以外に三菱や日立造船の進水式絵葉書を制作している。

このことから伊藤氏の作品は戦前、戦後で大きく分けられる。寄贈された絵葉書は大正15年から昭和28年の期間に制作されたもので、戦前の作品が144点、戦

後3年分の作品が31点である。寄贈資料は、ほかに油彩画4点、スケッチブック3点、関連物品7点からなる。

表 伊藤安次郎資料の内訳

絵葉書	油彩画	スケッチブック	関連物品
171点 (アルバム3冊)	4点	3点	7点

伊藤氏没後の川崎重工の進水式絵葉書について、別に当館が所蔵している川崎重工の絵葉書群を参照したところ、1953年以降は大阪商船の嘱託画家大久保一郎氏が引き継いでいた。伊藤氏は戦後は勿論のこと、川崎造船所に勤めていた戦前から播磨造船、玉造船所(後の三井玉野造船所)でも絵葉書を数枚制作している。進水式絵葉書に用いる船舶画の原画は、設計図から完成像をイメージして描画する必要があり、必要な絵画の技量と船舶の知識両方を兼ね備えた画家が当時においても稀少だったからであろう。伊藤氏の作品の特徴は非常に精密に描かれた船舶と対照的にペインティングナイフと筆の筆致を活かした海の躍動的な描写である。寄贈者のご遺族の説明によれば、伊藤氏は海や波の観察のために晩年、塩屋に居を構えたと言い、海の表現にこだわりを持っていたと推測される。船の波しぶきの立ち方は同業の大久保一郎氏の絵と比較してもより自然で、伊藤氏の観察力が現れている。

寄贈資料は完成した絵葉書をスクラップしたアルバ



図5 進水式絵葉書、「愛宕山丸」、「浪速丸」

ムが主であり、原画は油彩画のうち1点（商船三井、愛宕山丸）に限られる。伊藤氏の油彩原画は現存数が極めて限られており、管見の限りでは、他に鉄道博物館に1点、大阪大学に1点が知られる。このうち大阪大学所蔵品について、今年度実地調査を行った。本学海事科学科教員を通じて紹介を受け、大阪大学大学院工学研究科・船舶海洋工学コース教授の鈴木博善氏にご対応頂き、現在も阪大船舶海洋工学コースの会議室に飾られている伊藤氏の絵画「浪速丸」を調査した。調査日は2024年2月9日である。

「浪速丸」は60.5×90.8センチ（M30号）の油彩画で、当館に寄贈された「愛宕山丸」（33×53センチ；M10号）よりも大きい。海部分に乾燥による細かなヒビ割れがみられるが、コンディションは全体的に良かった。来歴は不明だが、大阪大学工学研究科の会議室に少なくとも30年以上前から飾られているようである。右下に「Yasujiro Ito」のサインと、「1951」と制作された年代が書き込まれており、後述の描画の特徴とあわせ、伊藤氏の作品であることは疑う余地がない。ただし、「浪速丸」という船は本稿時点で調査した限り存在しておらず、謎の多い作品である。

寄贈された絵葉書作品同様、写実的で精密な船と荒々しい筆遣いの海が特徴的である。画面の半分以上を占める雲は大きな塊のように描かれ、陰影表現で奥行きを演出している。また、浪速丸の船体は線描というよりも、色彩による陰影表現と細かな描きこみで非常に写実的である。画面奥に浪速丸以外にも船舶があるが、彩度が低くぼんやりした色彩で遠くにいることを表している。ファンネルマークは赤と黒の二色に塗られている。窓やデッキ部分には人影がカラフルな点で表現されており、客船であることがわかる。

伊藤安次郎氏の絵画作品は現存している作品数から鑑みても、油彩画としてではなく印刷物として鑑賞することを想定されたものであるが、激しい筆遣いで描かれた海の波の表現の迫力には圧倒されるものがあった。絵葉書では9センチ×14センチの画面、或いは絵葉書中の一部分に圧縮されているので目視ではわからなかったが、大画面でみることで船舶の描写の精密さをしっかり見ることができた。（藤本）